

商 及 び 商 人

大 泉 行 雄

こゝでは四角張らずに寛ろいで我々の物語りを進めやう――

一

孟子公孫丑章句上を見ると次の一節に出會ふ。孟子曰、矢人豈不仁於函人哉。矢人唯恐不傷人。函人唯恐傷人。巫匠亦然。故術不可不慎也。學者の註釋に従ふと之は職業撰擇の慎重にすべきことを諭したものであると言ふ。矢を製作する人は、其の矢が銳利で人を傷け得ることを願ひ、苟くも自分の作つた矢が役に立たなかつたなど、言はれぬ様にと心掛ける。甲冑の製造人は之と反對に、其の作つた冑を着た人は充分身を護り、假りにも人の身に負傷などのないことを只管心掛ける。人の利益の爲めに祈る者、人の死によつて生活する葬具作人に就ても亦同様に考へられる。然し、之

は本來その人々が仁又は不仁と言ふのではなく、職業の自ら然らしむる所である。故に術は慎まざるべからず。職業撰擇には大いに心せよとの結句が下されるわけであらう。

孟子が教へた職業撰擇の重要なことは、その比喻の巧妙にして穿ち得たる所より察して仲々に面白いと思ふ。唯その術不可不慎也を極めて狭く解して、故に職業は始めより撰擇しなくてはならぬとすると我々には賛成の出来ない結果が生ずる。成程醫者は其の繁昌の上から病人の多からんとを望み、葬具屋は又死人の多からんことを願ふかも知れぬ。然しそれだからと言つて、職業撰擇を嚴重にし誰もが葬具屋にもならず、矢の製造人にもならずとすれば共同社會はどうなるか。恐らく之では一日も存續することは出来ないであらう。だから私は術不可不慎也の一句は職業撰擇の重要よりも、夫々の職業に従事する者の態度を教へたものと見るのが至當かと考へるのであるが、之は其の道の人の吟味に任せて置く。私が問題とするのは、通常の解釋に従つて、職業撰擇の重要を教ゆるものとする時に、今言つた様な矛盾が発生する事實である。茲に私の話の緒を求める。

若し職業の性質より生ずる結果を慮つて、始めより職業を撰擇し、總べての人が好ましき職業にのみ従ふとすれば、好ましからざる職業に就くものは無くなるであらうし、斯くては社會生活が形成せられ得べくもない。分業に基礎を置く社會生活は、必然に職業の分化を齎らす、元來異なる職

業に就てその間に貴賤高下の區別はつけられないものだと思ふ。之は一個の常識論に過ぎないが、それにも不拘世の中には今猶一般に職業に關する貴賤の觀念は相當に強い。つまり理論上から言へば、一個の會社經營に於て、重役の職能も平社員の職能も、極端に言へば給仕の職能も、その間に貴賤高下の區別があるのではない。本來それ等を比較することすら出來ないことである。一企業の運行と言ふ點に於て、夫々の職能は同一標準に立つて其の重要性を有するものだと思はれる。船長の任務と同じく、一舵手の任務は重要であるべき筈だ。

この理論は職業と限定せず、産業の全般に移しても等しく言ひ得る。今日産業は大別して農業、商業、工業と分つが、その間に何れを重要とし、何れを價值劣れりとするかは全く出來難い事と言はねばなるまい。強いて言へば、農工商は今日の經濟生活を維持する作用の上で同じ程度に重要な事と言ふの外はない。或る特定の國又は地方と限定して、その國又は地方では農工商の何れかゞ重要なりとは言ひ得るが、一般的に重要非重要を決定することは出來ない。

所が實際には、この理論は然かく一般的に認容されて居るものではない。それは過去に於て無視せられた如く現在に於ても屢々看却せらるゝ。それは意識的にも亦無意識的にも蹂躪せられ而してせられつゝある。私は、我々の視野を主として商業に限り乍ら、此の間の消息を展開しつゝ、筆者

の商業及び商人觀に觸れて行きたいと思ふ。

（註） 孟子の「故術不可不慎也」を解して職業選擇の必要を諭したものと解する例としては、文學士中村徳五郎校註「孟子新註」一〇一頁を見られよ。

二

商業とは何ぞやと今更開き直つて聞き質す必要などない程、それは世間日常の事象であるが、之を簡潔に定義附け様とすれば決して容易な業ではない。恰も今日に於て猶、經濟とは何ぞやと云ふことが未決の問題であるのと一般である。元來定義を與へるといふことは獨り商業に限らず、多くの場合に於て至難の業である。複雑多様な組織、事象を簡單直截に而も露程の遺漏も無く道破すること其の事が困難なのに加へて、商業の如き場合では、商業そのものゝ内包が變化して行く。普遍妥當なる定義が此の意味からも困難になつて来る。

英佛の言葉では商業なる語に Commerce と云ふ字を用ひる。字書の示す所によれば、之は羅典語の *Commercium* から來たもので、*Commercium* は Com と Merx とが結合して形成せられたものである。而して Com は英語の Together（集める）を意味し、Merx は Merchandise（商品）を

意味する。即ち商業とは語源的に見て、必要なる財の蒐集分散を意味するものと解することが出来る。

日本の場合を考へて見るに「日本商人史」の中に種々の考證がある。その二、三を見ると、商は之をアキナヒと訓する。アキは飽きて飽充滿足を意味し、之は利益を得ること、アキナヒは此の營利追及を生業とすることを言ふ。又賣買は商業の中心的行程であるが賣るは得るに通じ、利益を得ることであり、買ふは交ふに通じ、交易を意味するものであるとも言ふ。又一説に言ふ。商人は之をアキンド、アキウドと訓するが元來アキビトでアキナヒを行ふ人である。之は秋人に通ずる。由來吾が國は千五百秋瑞穂の國であつて、農業を基としたのである故に、國民の大多數は農業者であつた。彼等は秋になれば作物を收穫し、生計に餘裕を生ずるのであるが、行商人は其の頃を見計らつて商品を持ち歩き之を賣つた。秋になれば現はれて來る故に秋人と言ひ、轉じてアキンドと言はれるやうになつたと。之は稍々一口噺的色彩の濃厚な話で餘り信を置くことは出來ない様に思はれる。何れにしても日本の場合には語源的に見て、商は交易と言ふこと、共に利益を得ることが共に考へられて居る様に見受けられる。このことは後に吾が國の封建時代の商人を考へる場合に關連せしめて觀察することが出來ると思ふ。

私は商業を解釋して二つの意味があるとなす。一つは固有の意義であり、その二は擴張せられたる意義である。固有の意義に於ける商業とは、經濟財の配給行爲を營利的組織によつて遂行するものである。此の意味に於ては、商品賣買が固有なる商業の形式と言ひ得る。然るに今日の商取引は獨り商品の賣買のみが孤立的に存在するものではない。又存在することが可能でもない。之を圍繞して幾多の専門的機關が存在する。商品配給の技術的方面も特化したるもの（運送業）、資本供給作用を特化したるもの（金融業）、危險保障作用を特化したるもの（保險業）、貨物保管作用を特化したるもの（倉庫業）等之である。之等が固有商業たる商品賣買を取卷いて其處に大規模なる配給組織を形成する時、吾等は之を呼んで擴張せられたる意味の商業となすのである。従つて、私に於ては擴張せられたる意味の商業とは一個の組織が竭くす作用である。故に固有商業を取卷く一機關を此の組織から切り離して夫れが即ち商業であるかどうかと言ふことは、私には意味なきことである。例へば保險業が商業と考へられるのは、之が商品配給行程に於ける危險負擔職能を掌ることによつて、商品配給行程に密接なる關連を有する時之が擴張せられたる意味の商業組織の一要素となすと云ふのである。従つて等しく保險業であつても、生命保險と云ふが如きは、私の意味の商業に包含せられないこととなる。それは營業ではある。法律は之を商行爲として規定はして居る。然

しそれは單に取締りの便宜てふことに基くに外ならぬ。商品配給行程に對して生命保險は直接第一次的の密接さを有つとは考へられぬからである。

こゝに於てか吾等の意味する商業が略々明白になつたと思ふ。私に於て商とは經濟財の配給行程である。今日は之を營業として行ふが故に營利が常に考へられる。營利のない商業とは自己矛盾とさへ考へられる。けれども私は必ずしもさうは考へない。今日、業と言ふ時は教科書は之を營業又は企業なりと教へ、營利と云ふことを屬性とするが、今日でも殆ど自足的なる耕作者の如きは農業を營むと言ふけれども、營利業と云ふ色彩は殆どない。商業はその性質上、他の産業に比して營利といふことが、鋭敏に來るのであるが、私は自足的農業に於て營利が考へられないと同じ様な商業を考へ得ると思ふ。つまり私には商業に含まれる營利追求は之は固有な要素ではないと考へられるのである。然らば商業の本質何處に在りやと問はゞ私は直ちに經濟財の配給行程を以て之に答へる。之が商の中心職能である。それ故に將來に於て營利追求が廢止せらるゝ場合ありと假定する時、今日の意味に於ける商業は存在し得ないけれども、商業の中心職能たる配給職能は依然として存在すると見なければならぬ。少くとも人間が自給自足に甘んずることなく、今日と同程度の或は夫れ以上の物質的生活條件を獲得せんには、今日と同程度の或は夫れ以上の配給職能が發揮せら

れねばならぬ。この意味に於て私は營利なき商——その場合商業といふ言葉は不適當かも知れぬが——を考へ得ると思ふのである。この事は重大な事である。何となれば商業の職能を忘却し、その附隨的要素たる營利を餘りにも重要視することから後段叙ぶるが如き弊惡を發生するからである。營利なき場合の企業者の職分に就ては既に早く上田貞次郎先生が「社會主義と企業者の職分」なる論文で之を論ぜられた（同博士著「社會改造と企業」卷頭論文）。この中で先生は、假令社會主義の社會が來て營利は行はれなくなつても、企業者の才幹は無用とならず、反つて益々必要となることを指摘せられたものであるが、營利なき商と云ふ私の意味も、之を一步も出るものではないのである。

（註） 商業は固有の意味に於て「經濟財の配給行程」を本質とすると言つたが、この場合二つの點を明かにする必要があらう。

一は經濟財と言ふことであり、二は配給と言ふことである。經濟財の觀念は經濟學上で議論の多い所であり、或る程度までは言葉の争ひの様にまで考へられる。今日賣買の對象となるものは有形財に限らず、權利なども入つて來る故に私はその場合も慮つて經濟財と云ふのであるが、然し通常の場合には、商業の對象たる經濟財とは物質的經濟財と有價證券とであると限定しても大過なしと思ふ。無形財の賣買は今日の商業の對象としては殆んど重大ではないからである。

配給行程とは、商品が生産者より發して最後の消費者に到達する過程を言ふ。故に之は商品の技術的なる場所的移動行程——運送——よりは遙かに意味が廣い。運送は配給の技術的手段に過ぎぬ。配給作用を竭くすと云ふ時は、吾等は商品流通のための職能を竭くすと解するのである。

然らば、商業が竭くす商品配給行程は如何なる効果を齎らすや。換言すれば、それに依つて我々の生活は如何に影響せらるゝや。我々は之に就て二種の影響を分つことが出来る。一は經濟的影響、二は文化的影響である。

經濟的影響は之を一言にして盡くせば、商品需要に於ける不調和の調節と觀ることが出来る。これに就てはポール・チェリントン(Paul Cherington)の分類が説明の便を與へてくれる(Paul Cherington: The Elements of Marketing, p. 14)。それに依れば此の種の不調和は四つに分つことを得る——

イ、量的不調和 (Maladjustment of quantity)

ロ、質的不調和 (Maladjustment of quality)

ハ、時間的不調和 (Maladjustment of time)

ニ、場所的不調和 (Maladjustment of place)

量的不調和とは經濟財の分布が之を自然に放任する時均一に行はれざるを言ふ。蓋し生産に必要な自然的要素(人間以外の要素)は極めて不均一に分配せられて居ると共に、之を用ひて生産を實行すべき人的要素も地方的に性能同一ではない。かくて、與へられたるまゝの状態に於て生産する時は、必ずや生産物の上に分量上の不調和が発生してくる。

此の意味に於て量的不調和は又場所的不調和と關連して考へられる。結局この二者は同一事實を商品の數量から見るか、地方的に即ち場所的に見るかによつて生ずる區別に外ならないのである。時間的不調和とは財の生産と消費との間に存する時間的懸隔を言ふ。かゝる不調和は生産に於ける自然的制限（例へば農産物の如き、或種の水産物の如き）に因ることもあり、或は種々の社會的原因に基くこともある。殊に經濟社會の規模が大となるに連れて、前述せる場所的不調和と共に時間的不調和は増加せられ行く傾向を有つのである。

質的不調和は之を二方面より論ぜられる。即ち人と商品との二面である。前者は人の欲求が地方的、民族的に異なることを意味し、後者は特定商品の生産が場所的制限を有することを意味する。従つて特定地域の人の要求は、その特定地域の生産のみを以て満足せしむることは殆ど不可能に屬する。こゝに質的不調和が発生する。

商品配給の職能は之等各種の不調和を能ふ限り調和せしむる所にその本來の作用を見出す。言ひ換へれば、生産と消費（生産のための消費をも含めて）の間に存する障礙、懸隔の除却に外ならぬ。

私は屢々思ふ。商品とは恰も娘さんの如きものであると。娘さんは適當なる時に最も速かに、娘

たるの地位を脱却して家庭構成者たるべき所にその職能がある。而も最も速かに其の地位を脱却するには、娘としての性能を最限に發揮せねばならぬ。換言すれば最も娘らしくあらねばならぬ。娘たることを脱却する最も良き途は最も良く娘たることである。商品に移して考へる。商品窮局の目的は商品たるの地位を脱する所にある。即ち最も速かに商品でなくなることが商品の目的である。而も最も速かに商品たるの地位を脱却する爲めには最も良く商品たるの資格を有たねばならぬ。商品をして最も良く商品たらしむる所に實に上述したる不調和の調節作用が発生するのである。

唯誤解すること勿れ、商品と娘さんとを比較したことは一片の比喻に過ぎず。天下の娘さんは即ち是商品なりなどは筆者は夢にも思ふものにあらざることを。

商業の經濟的職能は右に叙ぶるが如くであるが、之を通して第二段にその文化的職能が現はれる。蓋し我等が經營する經濟生活は夫れ自體人間の窮局目的ではない。經濟生活は、ヨリ、高き生活——それを若し文化と名附くるならば——文化的生活への手段たるに外ならない。商品配給職能も窮局に於ては總べて此の人類文化に向つて朝宗すと意識して之を遂行する處に、商業の文化的職能が認められるのである。

商業の文化的職能は一般人間生活の發達と共に漸次的に鮮かとなつて來るものであつて、往時の商業も其の副産物としては種々の文化的役割——文明の傳播とか平和の速進とか——を竭くして來たが、それは専ら無意識的のものであつた。之が次第に意識的となり行く所に商業の文化的職能の意義が存在するのである。福田博士は這般の消息を其の名著の中に於て凡そ次の如くに叙べて居られる(福田徳三博士、「現代の商業及び商人八九頁」)。今日の商人が爲す所は單に營利又は配給に止らず、それを通して消費者を教育すると云ふ任務を有する所に在る。之を名附けて需要教育といふ。一地方の發明品を他地方に傳へ、未だ知られざる便宜品を知らしめ、未だ感ぜざる需要を起さしめて、低度の經濟生活をば高度の經濟生活に誘導し行く所に需要教育の意味は存するのであり、之が現代商業の特色を形造るのであると。この觀察は肯綮に當つて居ると思ふ。商人の有つべき需要教育職能はやがて其の文化的職能に密接なる關連を有するものである。唯私見に依れば、今日現に行はるゝ需要教育は屢々其の目的が誤られて居ると思ふのである。それは營利追求より先づ出發して、その爲めに只管需要者の需要を喚起する點に需要教育が悪用せられて居る。例へば誇大なる廣告の如き、流行品の宣傳の如き之である。之等は誤られる需要教育であつて其の文化的意義を害するものに外ならぬ。需要者教育はその文化的意義を自覺する場合にのみ文化的職能を竭くすと考

へねばならぬ。

三

我々は前節に於て商業の本質が經濟財の配給職能に在りとの見解を中心として説述を試みたが、進んで現代の商業を理會するに當つては、茲に簡単な經濟史的鳥瞰圖を展開しつゝ、歴史的に導き出だすことが自然と考へられる。

經濟史家の教ゆる所によれば、經濟史の發端は大體に於て自足經濟から發する。その場合にも、小にしては家族、大にしては血族團體が考へられ、全く孤立なる個人なるものは思惟すること困難である。ポールが社會形成の單位としての個人と言ふ場合にも、それは正確には寧ろ家族と言ふが妥當であると云つて居るのは正しい。唯この家族、血族團體の内部に在つては多少の分業は自ら行はれたであらうが、その消費經濟は自己の生産したものを以て之に充當するのであるから自給自足の經濟と一般的に言ふことが出來やう。

然るに此の種の團體はやがて外部的交渉を有するに至る。始めは主として鬭争的手段により、戦争とか侵略とかによつて他の團體に接觸し、やがては又平和的に交通が開けてくる。茲に地域的

分業が發達せしめられ又交換が發生する緒を見出すのである。分業と交換との關係は何れが先であり、何れがあとであると、その間に因果の關係を見出すことは六ヶしい。寧ろ之は同時的である。強ひて争つても、鶏が卵に先立つか、卵が鶏に先立つかと言ふ様な争ひになる。石原純博士の「科學の根本問題」(四頁以下)なる書物を見ると次の如き説明がある。Aなる球がBなる球に衝突して後者を動かす時、我々は通常その間に因果の關係を認め、A球の衝突はB球の運動の原因であり、B球の運動は其の結果であると云ふ。然し之は正確でない。精密に言へば、B球が運動し始めるのはA球が衝突してから後にあるのではなく同時に始めるものである。B球の運動とA球の衝突とは同時的であると説かれてあるが、私は分業と交換の發達に關しても此の理論を借りることが正當と思ふのである。

此の交換も始めは所謂物々交換である。物と物とを直接に交換して、各自その欲求を満足せしめる方法である。之が最も原始的形態に於ける商業と見ることが出來やう。後には市場が發達して定期的な物財の交換が行はれ又専門的商人が其の間から發生して來たのである。

(註) 「日本商人史」中の喜田貞吉博士の論文、「古代の商人」に依ると、生産者から商品を買ひ之を市イチに於て需要者に賣るもの

即ち市人イチヒトが古代より發達したことを論ぜられて居る。尙その説く所によれば、市イチでは商品を來集する客に見せるために

「棚」を設ける。之を「見せ棚」又は單に「見せ」と云つた。市が遂に毎日開かれる様になると、この棚も常設のものとなり、之から「店」^{ミセ}が發達した。今日でも「お店に行く」とか「お店者」^{タナモ}とか言はれる。

然乍、物々交換は甚だ不便である。又時には不可能なことさへある。

先づAが甲なる物財を有つて乙なる商品と交換せんと欲するも、果して此の如き相手方が存在するや否や疑問である。假りに相手を發見し得たりとするも、甲の幾許と乙の幾許が適合するかに就て問題が起る。又若し甲なる商品が分割性に乏しきもの（生物とか寶石とか）である時は殊更にこの適合は困難にならう。或は又此の如き場合もあらう。相手方は乙商品は提供することを欲するも、それは甲商品に對してではなく丙商品に對してである場合である。若しAが丙商品の持ち合せない時は、更に丙の持主を探がさねばならぬ。かくの如くにして段々間接的になつて行くに連れて、愈々不便が加はる。この物々交換が間接的になる時、考へねばならぬことは物財の保存性のことである。生魚とか或る種の果實、野菜とかは保存性に乏しいから、かゝる迂回物々交換には適當しないのであらう。

物々交換の例は史實に多く認められる所である。小説「大菩薩峠」の初めを見ると、この峠に妙見の社があつて、此處を市場として物々交換が行はれた。即ち此の峠は甲斐の國と武藏の國との國

境にあるのであるが、甲斐の國に屬する萩原村の人が米を持つて來て妙見の社の前に置いて歸へる。すると武藏の國に屬する小管村の人が炭とか鹽とかを持つて行き、先きの米と取り換へて持ちかへる。假令それ等の荷物を置きはなしにして冬を越す事があつても無くなる氣づかひはないと。

大西猪之介教授の經濟史には沈黙貿易の例が載つて居る。その一節を其のまゝ借りて見やう「黒人と交易するカルタゴ人は其荷物を海岸におき、火を點じ、然る後其舟に再び乗る。土人は火を見て海岸に下り其の品物の傍に金の一定量をおき然る後遠く去る。カルタゴ人舟より下り其品物を検査す。もし其金が充分なりと思へば之をとりて去る。もし金の値不充分なれば再び舟に乗りて去る。土人再び來りて金を増す。何れも相手方を欺かず。カルタゴ人は價值等しと信ずるに至れる迄金に觸れず。又カルタゴ人が金を搬び去る迄土人は其商品に手を觸れず」と(大西猪之介、經濟學全集、第五卷經濟史上、八九頁)。

我々は曩に物々交換が間接的に迂回的になることを論じたが之に就てはジードが適例を提供して居る。カメロン中尉のアフリカ旅行記によると、湖水を横切るためにボートが必要となつたが、土人所有の適當なのを見附けた。所が土人は貸賃として象牙を要求した。然るに中尉は象牙の持ち合せがなかつたために、別の土人を探し象牙を求めた所、彼は對價として布を要求した。之も自分が

持たぬため、布を有つてゐる土人をさがし之を求めた所、對價として酒を欲したので、幸ひ持ち合せの酒を提供し、かくて布から象牙、次に象牙からポルトと溯つて其の目的を達することが出来たと (C. Gide : First Principles of Political Economy, pp. 49—50)。

之は寔に興味ある實例であつて、物々交換が有つ不便と困難とを雄辯に物語つて居る。この爲めに經濟生活の長い進化の間に、或る特別の物が、特別の働きを竭くすものとして一般の物財の上に浮び上つてくる。之が即ち貨幣である。固より我々は、古代の人々が物々交換の不便を意識して、意識的に貨幣を作り出したと言ふことは、近代の頭を以て古代を説明するものであつて不當であらうが、物々交換に内在する不便困難が潜勢力となつて、生活の進化の間に貨幣が浮び上つてきたものであると見るのは妥當を缺くものではあるまい。この貨幣も始めは商品そのまゝの形で用ひられるが次第に發達して來るに従つて、貨幣を形成する材料（素材）と貨幣の職能とが分離して來て、遂には紙幣の様に素材價值の殆どなき貨幣が發生してくる。

貨幣の發達は經濟生活の進化に驚くべき影響を與へたことに就ては言ふを俟たぬ。之によつて物々交換の不便と困難は除かれ、物財の流通が圓滑にせられる。貨幣が交換の間に介在することによつて、本來主觀的なる價值を客觀化し數量化することが出来る。或物に認める各人の主觀的評價な

るものは、人各々その趣きを異にするから、それ等を比較することは不可能なことである。こゝに第三の共通なるものが現はれて、各々の主觀的價値を、この共通者の一定量を以て示す時に始めて比較が可能になる。従つて又交換を速進せしめる所以ともなる。

クリフ・レスリーは其の評論集 (C. Leslie: Essays in Moral and Political Philosophy) に收めた卷頭の一文「貨幣の好愛」の冒頭に於て、人間と他の動物とを識別するものとして貨幣を示し、有名なる「ヴェニススの商人」の一句を引用して居る。金貸のシャイロツクはアントニオの平素公正な態度に少なからず怨を抱いて居る。そのアントニオが友人パツサニオのために金錢上の世話をすることになり、仕方なくシャイロツクの許に借金に來る。シャイロツクが言ふ――

あなたは私のことを人殺しだの、犬だといひ、唾をかけたり蹴つたりした。
それに今は金を貸せと言ふ。

犬に金がありますかい。三千兩なんて犬は用立て出來ますかい？

(坪内博士譯による)

寔に犬には貨幣は無い。貨幣は經濟生活發展の上に偉大なる役割を有するものである。貨幣經濟が漸次發達すると共に生産技術が發達し、英國に於ける産業革命となり、その影響は世

界的に傳播せらるゝに至り、こゝに近世の資本主義が確立せらるゝことになつたのである。資本主義制の下では、各種産業は原則として企業者個人の創意によつて經營せられる。而もその場合重要な企業者心理をなすものは利潤の獲得である。商業も亦近代企業の一つとして等しく資本主義化せらるゝことを免れなかつた。利潤追求は即ち貨幣の獲得である。従つて商業も亦貨幣獲得のために存在するが如き傾向を呈するに至つてきた。

我等の考察によれば、元來貨幣の役目は、物財の交換をして圓滑迅速ならしむる所に其の働きがあつた。かゝる役目をする貨幣なるものは、その故に又一般的通用性を獲得して來る。而して貨幣制度が發達すれば、之は法律の定むる所として認められ、法律的強制性を賦與せらるゝのである。

加之、社會生活の或る部分に於て貨幣は此の強制的性質によつて、本來の交換媒介手段以上に容喙してくる。例へば損害賠償とか慰藉料とかの場合之である。元來、精神的被害の如きは之を金錢に評價することの不可能なことと言ふまでもない。それにも不拘、貨幣が實際に於て賠償手段として撰ばるゝ所以は、今日に於てそれが一種の力を持ち、萬人好愛の標的だからである。

茲に於てか我々の言ふ所はこうなる。貨幣は交換媒介手段たる所に其の職能を有するが、この職能發揮の間に一種の力が現はれて來る。それは物財の支配力に端を發して遂には他種の間關係に

まで侵入して行くものである。この觀點より眺れば、貨幣は實に或る學者の云つた如く社會的生産物に對する分配の参加材を意味する。而も我々の生活が物質的條件によつて嚴肅に制約せられ、その物質的條件は社會的生産物として生産せらるゝ今日は、社會的生産物に對する分配参加材の大小は、延いて社會生活に於ける一般支配權の大小に關連して來る。このことは多く言ふを要しない我々眼前の事實に外ならぬ。社會的生産物に對する分配参加權を代表するものは、即ち反覆して叙べ來たつた貨幣であるが故に、貨幣獲得の欲求は此の社會生活に於ける支配權の獲得欲求を意味するのである。

貨幣が有つ此の力は或は之をば資本の有つ力と言ふことも出來やう。資本主義制が有する特色は他にも一つならず指摘し得やうが、資本が有つ特殊なる支配力にも其の一つを認め得るであらう。此の資本主義精神が企業に現はれたるものが利潤追求に外ならぬ。近代資本主義制の治下に於ける商業も亦言ふまでもなく此の傾向を多分に示しつゝあるのである。之が現代商業の實相であり、現に我々が直面しつゝある所のものである。進んで批判の立場に立たんとする我等は先づ此の事實を根底に於て把握して出發せねばならぬ。

四

暫らく搦め手から攻めて見る。

夏目漱石氏の代表作の一つたる「吾輩は猫である」の中に次の様が挿話が誌されてゐる。昔स्पエインのゴルドヴァと言ふ町では、夕方になつて教會の鐘が鳴り出すと、老幼貴賤の差別なく、婦人は皆衣を脱いで川に入り、からだを淨める習慣であつた。但し男子は一切之に参加することを許されぬ。暮方で、あたりが模糊として居る薄明の中に婦人達の姿がぼんやりと見えるのであつた。所が非常な悪戯者があつて、或時教會の鐘撞番に賄賂をやり、いつもよりも少し早く鐘を鳴らさせた。所が「女は淺墓なもの」だから「そら鐘がなつた」といふので、皆が争つて衣を脱いで川に入つたが、どうもふだんと様子が違ふ。仲々日が暮れない。橋の上では大勢の男達が笑つて見てゐたといふ話である。

元來、浴みするのは暮方なのであるが、暮方には鐘が鳴るから、鐘は唯暮方の合圖としたのに過ぎない。だから、鐘が鳴つても、晝日中では浴みするわけには行かないのである。所が、鐘が鳴つたら川に入ると云ふ生活を繰返へして居る間に、そこに一つの型が出来上る。「鐘が鳴つたら川に

入るもの」との型がそれで、而も之が人々を支配する。そのため、うつかりして明るい中から川に入る様な滑稽が出来上るのである。

もう一つ別な例を持つて来る。現代獨逸の有名な作家にゲオルグ・カイザーのあることは周知の所であらうが、この人の作品に「瓦斯」と云ふのがある。その中に、ある新婚早々の労働者の細君が、労働者の集會で自分の良人のことを話す所がある。細君が言ふ、私の良人は工場の配電板を足で踏んでは、車を止めたり動かしたりする労働者であります。だから私の良人は足なのであります。足だけが工場にとつては必要なのであつて、人間そのものは必要ではないのです。良人は愉快に生きたいと思ひました。處が足が良人を動力の方に引張つて、良人を自由にさせないのです。毎日々々足のついた人間ではなくて、人間のついた足が労働を續けて居りました……。

足のついた人間ではなくて、人間のついた足と言ふ此の警拔なる一句に三歎の叫びを禁じ得ないものは唯獨り此の論文の筆者だけであらうか。私は思ふ、之は獨り此の労働者だけの問題ではなくて、人間生活の汎ゆる方面に向つて警告を與へる一句である。教師は教壇で講義をする。學生は之を聽き乍ら筆記をする。寔に結構ではある。然し我等は其の時、果して口のついた人間が講義をし、手のついた人間が筆記をしてゐるかどうかを尋ねて見なくてよいか。往々にして——否屢々

——人間のついた口が教壇の上で放送をし、人間のついた手が之を書き取つてゐるのではないかと反問する必要はないか。

論じて茲に至れば、多數の讀者は、筆者が何故に漱石を借り、カイザーを紹介したかの意圖が明かになつたであらう。人間は其の生活の間に、生活をより良くせんがために種々なる組織を作り制度を定める。組織及び制度は、意識的に或は無意識的に作出々現するにせよ、必ずや之を必要とする事情があり、生活のために存在する。然るに一たび組織制度が整備すれば、そこに一個の形式が出来上る。私は之を名附けて社會生活の型と稱する。型が出来上ることは決して悪るいのではない。共同生活に於ては必然に何等かの型は必要なのである。或る意味に於て社會の進化とは、社會生活の型の展開——即ち型の軌跡とも言ひ得る。問題は型の生成に在るのではなくて、型が有つ支配力に在る。生活の型が一たび生成すれば、やがて夫れは支配力を有ち、生活そのものを支配する。此の支配も我等は或る程度まで之を是認する。然らざれば型は全く型として存立し得ないからである。さう乍ら、之が一定の限度を越えるに至れば、そこには獨り型の支配ばかりが残つて、生活そのものの意義が失はれてしまふ。それは鐘が鳴つたと云つて向ふ見ずに川に飛び込んだスペインの女達の生活であり、人間のついた足で働く勞働者の生活である。

本來社會生活の型は、人間の生活が先で、型は後である。生活のための型であり、型のための生活ではない。酒は人が飲むもので、決して人が飲まるべきものでない。にも不拘屢々酒が人を呑む。同様に型が人間生活の總べてを支配し拘束し制約する。生活のための型が逆轉して型の爲めの生活の如くに現はれる。

前節我等は貨幣の發達が經濟社會に有する偉大なる貢獻を叙べ、それと共に他の産業技術的進歩の結果が生産方法に一大改新を齎して遂に今日の資本主義經濟組織を生ぜしめたことに論及した。資本主義の社會に於ては商業も亦代表的企業の一を形成する。而も企業の經營は營利主義に據つて行はれ、利潤追求が極めて有力なる動因となつてゐる。何故に利潤を然かく追求するのか？ 我々の説明によれば資本（貨幣）獲得の爲めである。流行の言葉を以てすれば資本増殖の爲めである。何故に資本を獲得するか？ 我々の説明によれば資本は支配力を有するからである。この故に商業も亦資本獲得のための手段とせらるゝのである。

商業は經濟財の配給を司ることを以て其の固有なる職能とする。それが今日の經濟社會の下では營業として行はれる。營業としての商が遂行せられ行く間に、それは一個の型を作り、支配力を有つ。營利は従たる要素であり、配給が主たる要素であるのが逆轉して、營利のための商品配給とな

る。一步を進めては營利のためには手段を問はざるの悟界にまで入る。かくなれば商業の本質は全く失はれたりと言はねばならない。今日商業が屢々弊害を暴露して社會の福祉を侵害し、商人が又商業道德の缺除と言ふが如き點より攻難せられる原因の一つは、私によれば實に此の營利主義が本來の領域を越へて進出し、商のための營利にはあらずして營利のための商と云ふ一個の型を生成した所に求めねばならぬのである。

極端なる營利主義と言ふ型の有つ支配力は資本主義制の下に於ける一般的傾向である。これは獨り日本と限らず資本主義が極端に走つて生活そのものと生活の型とがその位置を取り代へた國に於ては何れも同様である。私は今や轉じて我が國の商業に特殊なる事項に就て考察を運らしたい。

歐羅巴文明諸國の經濟史、分けても典型的發達の階段を示す英國の經濟史を見ると十六、七世紀に於ける近世國家の成立から産業革命を經過して資本主義制の今日に至るまで、そこには歴然たる秩序が認められる。近世國家成立時代に一世を風靡した思潮は所謂マーカンテイリズムであり、國家萬能主義を以て個人を統制支配した。降つて十八世紀より十九世紀にかけては此の國家萬能思想に對する反動時代である。所謂自由主義時代と名附け得るであらう。而して此の思想の經濟的成果が資本主義の完成となつた。二十世紀に至つては、資本主義思想と竝んで其の批判者たる諸思想が

次第に有勢となりつゝあることを認め得る。若しマーカンテイリズムを以て正となし、之に對する自由主義を以て反とするならば、二十世紀は正に合の時代となるべきであり、之によつて止揚せらるべき運命を荷負ふものとさへ考へられるのである。

而して、マーカンテイリズムに先立つ時代は中世の封建時代であつた。工業に於ては手工業が勢力あり、商業も未だ發達せず商人ギルドなどが有力に存在した。この封建的制約を打破する所に近世國家成立の意義があり、經濟生活に現はれたるものがマーカンテイリズムである。之に従つて中世の組合や諸侯の持つ特權や制限が次第に廢せらるゝと共に、強大なる國家の手中に權限を集攬して行つた。之によつて或る程度まで産業は進歩せしめられ、中世の小規模なる範圍を擴大し、資本が漸く其の役割を認識せられてきた。それ故に、例へばヘルマン・レヴィ (H. Levy) の如きは十七世紀初頭以後の英國は初期資本主義の時代で (Die frühkapitalistische Epoche) あると名附けて居るのである。

(註) H. Levy : Die Grundlagen des ökonomischen Liberalismus in der englischen Volkswirtschaft, 1928, s.

猶レヴィの一書「國民性と經濟」に就ては室谷賢治氏が本誌上で嘗て紹介せられた。

斯くて英國等に於ては中世的思想はその後に相繼いで生じたる諸思想によつて既に一應は批判せ

られ終つたものである。故に假令其の餘勢を殘存せしむる場合でも決して大なる力は有ら得ないのである。

翻つて我が國の状態を見れば事情は右と大いに異なる。我國に於ては明治維新を界として智識を世界に求め、萬機公論に決するの新政となつたのであるが、その直前は徳川三百年の幕政があり、純然たる封建制度であつた。今日、明治・大正を経て世は昭和となつて居るが之を明治に還元すれば昭和四年は明治六十二年である。明治維新を去ること僅かに半世紀餘たるに過ぎない。此の短かい年月の間に我が國は西洋文明を輸入し之を我が國土に移植した。自由主義に基く資本主義の精神は斯くして國內に誘導せられた。然れども此の如き建設は飛躍的にはなされない。封建時代から直ちに資本主義社會を生み出すことは不可能である。歐洲では其處に國家統制の時代があつた。我が國に於ても亦何等かの形に於て夫れが必要であつた。即ち現はれて民業の保護、監督、支配となり、之が今日に於ても猶各方面に殘存するのである。

此の如く我が國の現在は徳川幕府の封建時代を去ること僅かに半世紀餘である。従つて又其の時代の餘力が比較的力強く殘存するのである。單なる形式だけから言つても、我々は往々にして今日猶田舎の老夫子や百姓などに丁髷を貯へて居る人さへ見受ける。形は比較的變化が早い。思想に

至つては形程に速かなるを得ぬ場合が多い。私は此の封建社會が有つた思想にして而も今日相當に強く人々の腦裡に巢喰ふものゝ一つとして其の時代の商業及び商人觀を考へるのである。

徳川時代に於て一般に認められたる社會階級觀は所謂士農工商の區別であつた。之は單に社會階級が四つあるといふ意味ではない。士農工商の順序は自ら其の間の輕重貴賤を言ひ表はしたものである。従つて士は最も重く商は最も輕い。この事から又士は其の志操高邁にして貴しとせられ、商人は其の胸中不純にして下賤なりとせられたのである。内池廉吉博士の物せられたる「市場組織論」中の一論文「中央卸賣市場に就て」には市場制度の發達が叙べられてあるが、その中に徳川時代を説いて日本橋の魚市場を擧げて居られる。即ち當時は幕府の膳所(賄所)に魚を供給するに日本橋の魚市場を利用したが、之は商人から徵發したのであつた。而も初めは全く無料で取上げらる。後には名目だけの代金を下げたが實質はやはり徵發に外ならなかつた。かくなれば商人は徵發せられるのを怖れ、又嫌ふ。そこで種々の詐りを用ひて魚を隠す。役人の眼を盗んで秘密に取引をする。今日でも残つて居る「耳やり」(商人同志耳に手をあて、秘密に取引する方法)とか「袖引き」(袖の中に相手の手を入れて値段を掛合ふ方法)とかは此の秘密主義の餘弊であると記されて居る(同書一〇〇—一〇一頁参照)。此の史實は武家を尊重し、商人を蔑視した最も良い例證と言

ひ得る。此の如く社會生活の實際が商人輕視の風潮を示す時代には、之に並んで實際に適合する理論が存在する。昔普魯西のフリードリッヒ大王は揚言して「余は余の力で取り得らるゝものは先づ前に取つて置くのである。さうした後で余の行動を是認すべき理屈を付けて呉れる學者を見出すことは常に容易のことであつた」(瀧本誠一氏、近世歐洲經濟史、一五一—一五二)と言つたと言はれて居るが、之は或る程度まで事實であつて、徳川時代の商人に就ても亦同様な實證を擧げることが不可能でない。再び「日本商人史」を採り、その中に收められたる中村孝也氏論文「江戸時代に於ける町人に對する思想」を見ると次の如き例が誌されてある。

山鹿素行は町人に對する差別待遇を論じ「……その用所濟まば、町人退去すべし。食を喰ふことを許さば、側に入つて食すべし。假にも足付の膳たるべからず。富有の輩たりとも、此の制を背くべからず。日比出入の士族たりとも、相伴密會可處罪科也」と言ひ、早川賢當は、

士は智仁勇の三徳を樂み、心苦む。是れ分際の祿を得て忠義に勵む故也。

農は體を泥土に苦み、心樂む。是れ定まれる年貢を奉りて鹿食する故也。

工は體も心も苦むばかりにて、たゞ名を惜みて、上手の譽を樂む。

商は差あれども、體・心共に樂むは商民也。

と言つて、商人のみが獨り安樂に在ることを叙べ、その社會に竭くす勞働者の少きことを難じた。進んで荻生徂徠に至つては商人攻撃は最も辛竦を極めて居る、曰く

總じて商人は、利倍を以て渡世とする者故、當時の有様にても、一夜檢校とも成、亦一日の内に潰もする物にて、是、元來不定なる渡世をする者故也。

武家と百姓とは、田地より外の渡世は無て、常住の者なれば、只武家と百姓の常住に宜しき様にするを治の根本とすべし。商人は不定なる渡世をする者故、善惡右に云ふが如し。然れば商人の潰るゝことをば嘗て構間敷也。是又治割の大割の心得也と可知。

(日本商人史、一七九—一八二頁參照)

固より徳川時代に在つても、論者の中には職業平等論を唱へた者もないのではないが、一般風潮としては、やはり士農工商の社會階級觀念が人々を支配したことを是認せねばならぬ。

此の如くにして醸成せられたる商人蔑視の思想は二様の方向を取つて働く。一は商人以外の階級が商人階級に對して抱く輕視的感情である。二は商人自身が自らを以て賤しと卑下し、自ら其の志操を低下せしむる事情である。この結果は詐術を用ふることが一般道徳上では極めて嚴格に制裁せられ乍ら、商取引、商人の場合には、懸引とか商略とかの名の下に餘り不自然には思はれなくな

る。それは一般人がさう感ずると共に商人自身も亦さう感ずる。こゝに商業が今日に於て猶比較的輕視せらるゝ一因が殘存すると考へるのである。封建時代を去ること時間的に餘り遠からざる我が國の現在に於て、殊に此の中世的社會觀の餘力が今猶人々の思想の基底にしがみ附いて居ると私は考へるのである。

五

大阪朝日新聞に「財界六感」なる小欄あつて、折に觸れ機に應じ經濟商業の各般に涉りて寸言以て該切なる批評を下し、時には主張し、時には嘲笑し、時には諷刺して警世の役割を竭し居ること周知の所である。折節そこに現はれたる我が國商人の心すべき二、三の事實、手許に録したるものを借りて茲に我が國商人の一斑を伺はう。

外國貿易に當つて、我が國商人が屢々不誠實を敢てし、直接には商業信用を失墜せしめ、間接には國民全體の品位まで疑はるゝが如き種々のエピソードは我々の屢々耳にした所である。殊に戦争の如き混亂緊急の虚を衝いて我が商人が不正手段を用ひ巨利を博したとの風聞は往々にしてきかさる。物の本によれば、昔河村瑞軒といふ男が、宇羅盆で民家が川に流した胡瓜や茄子を拾ひ集め

賣つて資本を作り其の百萬長者となる一步を踏んだとある。考へて見れば随分陋劣な心事で目的の爲めには手段を撰ばざるの概を露骨にも現はして居るではないか。今日に於ても瑞軒流の商法は尙相當に存在するのではあるまいか。罐詰の中に石を入れて輸出したとか、心の無い鉛筆を送つたとか、着色した茶を賣つたとか面白からぬ噂は大部ある。けれども之は噂である。而も私は考證家でも何でもない。私は寧ろ之等の風聞が文字通りに噂であることを願ひ又さう信ぜんと欲するものがある。

然乍、以下提供する二、三の事實は我が國一流の右新聞が掲げた所であり、而も時間的に餘りに近き事柄である。私は不幸にしてそれ等に對しても之を事實無根として葬り去るだけの勇氣を持ち合はさぬことを甚だ遺憾に思ふのである。

之は大正十五年三月二日の記事であるが、米國駐在の領事から、京都商業會議所に對して警告が來た。それに依れば、京都府から輸出する筍、松茸、青豆等の罐詰に斤量不足のものが多いため日本商品は甚だしく聲價を傷け、而もその商品の輸入商は之がために多額の罪金に處せられたるのであると。加之、此の種の不正品は品評會などに出品して表彰された商品に多いのであつたといふ。依つて京都では検査を試みた結果、同一型の罐詰につき、牛肉は内量最多百十一匁、最少四十五

匁、筭は最多百五十匁、最少百二十匁といふ驚くべき差のあることを發見したとの事である。

同年三月五日の同紙上記事によれば、桑港日本商品陳列所から商工省商務局へ報告が來た。それによれば、米國向本邦食料品罐詰類には、屢々中味が規定の容量に達せぬものがあり、税關で不正品として、何れも罐の表面に Slack Filled Can (正味不足) の貼紙をつけてから荷受を許される。それを英語を解しない日本移民が平氣で買つて行くといふのである。

降つて更に最近の記事を取る。スラバヤからの通信によれば、大阪の某商店製に係はる匙が商標を偽つて同地に輸入したことが發見され、法律問題を惹き起したとのことである。即ち同商店製の匙は「コップ印」であり、商品にもそれが印されてあるにも不拘、外装の紙函に貼付した印刷物は、獨逸製「豚印」の製造會社及び地名がそのまま用ひられたのであつた。(大阪朝日、昭和三年三月七日所載)。若し此の事が眞實だとすれば、多數の讀者にとつては殆ど其の心事を推量するだに困難な事實ではないか。我等は之を如何に解釋したらよいのであるか。

右に叙べたる二、三の實例よりして、直ちに日本商人の全班を推すことは無理であらう。固より夫れは一斑を示すに過ぎない事實であらうが、或は又反面より言へば、夫れは單に明るみへ出されたる二、三の不正事件に過ぎず、隠れたる同種の事實は幾許あるか測り知るべからずとも推論し得

ぬではない。我等は嘗て數年前に、東都に於ける一流大百貨店が斤量の不足なる商品或は中味の腐敗せる商品を賣つて新聞紙を賑やかしたことを記憶してゐる。不正は國の内外を問はず等しく責めらるべきであるが、強ひて若干の辯護をすれば、國內では何と言つても内輪同志である。或る程度までは之を寛容し易いであらう。

然るに今叙べたる數個の例は何れも外國貿易に於てある。外國貿易が我が國の國狀よりして如何に重大なるかは敢て事新らしく論ずるまでもない所だ。昔の鎖國とか自給自足とか言ふことが到底出來ない今日、我が國人の生活必需品が我が國土からのみ生産せられない我が國、之等を考へれば外國貿易の重要は餘りにも明白な事實だ。而も重大な事は、日本からの輸出品は一本の寸燐に至るまで夫れが日本國を・日本人を・日本商人を象徴して居るといふことである。之は又餘りにも平凡な事である。去乍、今日の日本は此の平凡なる事を聲を大にして叫ばねばならぬ状態にあるのだと言つたら諸君は抑々何と思はれるか。

茲で我等が前節に縷々として説き及んだ所を思ひ併されたい。近代資本主義が有つ極端なる營利追求の思想、それに加へて我が國に在つては封建時代を去ること猶日淺く、商業賤視の牢固たる思想、従つて生ずる商人自身の卑屈なる感情、之等を以て説明するに非されば、今日二十世紀の今日

に於ける曩の事實の數々を我等は解くに由がない。

或は筆者を責めて言ふであらう。商人が營利に走るは獨り我が國のみにあらず。他國に於ても亦同様の事實は無きにしもあらざれば獨り我が國商人を責むるは不當なりと。斯くの如き論者は我等にとつて縁無き衆生にすぎぬ。目には目を、齒には齒を經濟關係にまで齎らさねば止み難き人、顧みて他を言ふことに依つて自己辯護を試みんとする人々とは我等は永遠に其の生活の平面を異にせざるを得ないからである。

六

嘗つて年若くして此の世を去つた經濟學者は斯う言つた。問題を正しく提出することは、既に之を半ば以上解決したことであると。之は意味深い言葉である。 x y なる未知件を含む複雑なる代數應用問題に於て、我等が若し正當に方程式の定立を發見するならば、その後は、方程式を機械的に解くことによつて、 x 及び y が何を意味したかを明かならしめ得る。問題を正當に提出し、理會するならば、従つて採るべき方策の方向は自ら指示せらるゝ。

商及び商人を我等の課題として尋究することによつて、問題の所在を凡そ闡明ならしめ得たと

信ずる。之が果して問題の正しき提出なりや否やは、讀む人々の判断に委ねなければならぬが、必ずしも不當なる提出ではないと私は信ずるのである。従つて現在我が國の商及び商人に對する方策は、私に在つては如上の説明の間から自ら其の方向を指示せらるゝこととなる。福田博士は曩に紹介した「現代の商業及び商人」の中で諷刺的な言葉を吐かれた。曰く商人と言ふ語は英語の Business-man の譯語である。然るに今日は Business の方は人々が大聲に高く響かせるが、Man の方は一向に聞えぬ。けれども之は非常な誤りだ。大事なのは寧ろ Man である。マンを大きく響かせねばならぬ。即ち商人は商人たる前に人であることが必要だ。人間として立派な人格者にして、始めて商人としても立派な商人となり得るのだと。極めて肯綮に當れる言葉である。然らば商人が今日、福田博士の所謂 Business-cat や Business-dog に墮することなく、真正なる Business-man たり得るがためには如何にすべきか。

答は極めて簡單である。それは商の固有なる職能を認識することといふ一句に盡きる。我々の研究に依れば商の固有なる職能は經濟財の配給に在つた。従つて商品配給が常に主體であらねばならぬ。營利のための商業は正しく此の本道を離れたものなのである。故に、今日我が國の商及び商人をば、その在るべき姿に於て眺めんと欲すれば先づ第一商業本來の職能を顧みなければならぬので

ある。

ジョン・ラスキンは叙べて言ふ――

兵士の職業はその國民を護るに在る。牧師の職業は其の國民を教ふるに在る。醫師の職業は其の國民を健康ならしむるに在る。法律家の職業は國民に正義を行ふに在る。商人の職業は國民に物資を供給するに在る。

扱て之等の職業を爲す人の本分は何處に在るか。それは必要なる時に、國民のために死する所に在る。商人の職分は物資の供給に在るが故に、此の本分のためには生命をも賭しなければならぬ。之によつて利益を收むることの本務に非ることは、猶醫師の職分の診察料を受くるにあらざるが如くである。

「Unto This Last」に示された右の一節は我等が正に言はんと欲する所に外ならぬ。之を吾が國の商人に移す時、我等は先づ封建的商人蔑視觀を第一に排撃せねばならぬ。若し商業教育が今日特に必要なりとせられ、或は商業道德が云々せらるゝ理由ありとすれば、その原因の一つは此の點に在らねばならぬのである。

我等は本論冒頭に於て孟子の一節を引用し、その術は慎まざるべからずを解して、職業撰擇の重

要を教ゆるものとなす學者のあることを叙べ、若し之を此の如く解する時は、今日の社會にとつて不當なる解釋となる所以を叙べた。商人蔑視觀は、職業貴賤觀と相通ずる。然れども、分業に立脚する今日の産業社會は、職業に貴賤の差別なきこと言ふまでもない。商品の配給職能を司る商は、他の種々なる職業と等しく重要である。我等は其の間に輕重の差別をつけ得ぬ。世の中に父親が母親より大切だと言ふ人があるか。母親が父親より大切だと云ふ人があるか。

商人蔑視觀の排除は二方面に向つてなされねばならぬ。一は一般社會人をして商業の眞義を悟らしむることである。之なくしては今日の經濟生活が不可能なる所以を悟らしむることである。二は商人自身をして商の眞諦に觸れしむることである。商業に於て何が本であり、何が末であるかを知らしむることである。商業教育が、その存在理由レゾン・ダートを有つとすれば茲にその主力が置かるべきではないか。今日の我が國には幾百の中等商業學校があり、十に餘る高等商業學校がある。之等の商業教育機關に於て、果して茲に言ふが如き點に其の主力を注いで居るや否や。私は少なからず之を疑問に思ふ。筆者は中等商業學校に於ても、商業技術の教授以上に商業本質の教授を主にしなければならぬと信ずる。苟んや高等商業學校に至つては言ふまでもなく主力は茲になければならぬ。今日高等商業學校の學科課程なるものは人も知る如く雜然多種なる各種智識を注入するものである。而

も往々して、實際界が役に立つ人間とか、直ぐに間に合ふ人物とかを要求するために、學校に於ては此の需要に應ずべく、實際的と云ふことが不當に尊重せられる——少くとも學校行政家は斯くせんととの努力を示す。誤解すること勿れ。筆者は固より商業實務の練達を輕視せんとするものではない。唯之と並んで重要なことは、商業が經濟社會の機構の上に如何なる役割をつくすかとの基底を把握することであると云はんと欲するのである。一步を進めては實務技術の末葉を教授する前に商業の本質を充分悟らしめねばならぬと云ふのである。此の本質を把へずして教へらるゝ百般の智識、技能は小兒の玩具箱と何等の選ぶ所もない。雜然として集められてはある。けれども唯それだけではないか。何の統一があり體系があらう。共同海損もよからう。簿記もよからう。さては銀行、爲替、海上保險より取引所、各種政策何れも不可とはしない。重要なことは、之等の各分科が何れも商業の本質——或は廣く言つて經濟現象の本質——より出發し、而して又之に立ちかへり、斯くして各分科を教授しつゝ、而も其の落ち行く先は何れもが商業本質の説明にあらねばならぬと思ふのである。この用意を以てするにあらざれば、我等は木を見て遂に林を見ざるの結果に陥らう。保險は知つてゐる、簿記は知つてゐる。けれども夫れ等が渾然として作り出す商業機構に就ては何事も知らざるの不幸に遭遇しやう。而して、此の木を見て遂に林を見ざる底の商業教育が幾許今日

の商業に弊惡を及しつゝあることか測り知れぬ。商業固有の職能を忘れて、その末技に走るの徒は往々にして此の誤られたる商業教育の果實とも言ひ得る。かくして商人蔑視觀の排除と商業本質の把握とを若し商業教育によつて達成せんとするならば、今日の商業學校をして改めてその根源を顧みらしむることが急務である。

短兵急に牙城を衝かんと欲する論者は言ふであらう。曩に營利主義の弊害を論じ、その發生原因として近代資本主義制に論及した筆者が何故に其の方策として先づ之に鋒を向けぬのであるかと。筆者も勿論之を忘れたのではない。營利主義の弊を有たぬより、良き組織の出現は衷心之を希望するものである。我等は人類社會進化の理想として今日の如き資本主義社會が有つ缺陷の失はれたる社會状態を仰望する。而もそれは、單なるユートピアとしてではなしに、到達し得べき理想として之を仰望する。今日の社會が此のまゝに持續するとは誰が夢想しやう。又持續せしめねばならぬとの理由が何處に存在しやう。之をしも否定する人は過去より現在に至る歴史的進展の意義を悟らざるものである。現代社會のみに就て、特にその *Infalibility* を主張するの大膽さと獨斷さとを有つ人である。

此の故に私は現代を以て一時的のものと考へ不易なるものとはなさぬ。故に經濟社會の進化が營

利主義に基調を置かざるより、合理的組織を齎らすことを期待する。一步を進めて、その所謂より合理的なる社會組織は如何にして實現するや、又實現せしむべきやの問題に入れば、これは即ち今日現時の社會思想に於て其の中心的波紋を作りつゝある理論闘争に外ならぬ。我等はそこに急進的なもの、微温的なもの、或は又折衷的なものなど千姿萬態の混亂を見出す。それ等政策の検討は我等の論外である。我等は唯、現在の經濟組織が不易なるものとは考へざること、従つて商業も亦より高度なる社會組織に順應して進化して行くものなることを指摘すれば足る。

資本主義經濟社會を改革し或は改良するがために如何なる手段を採るべきかは今之を言ひ得ないけれども、それにも不拘茲に言ひ得ることが唯一つある。それは社會思想に於て如何なる理想を抱懐するとも、又他日如何なる社會組織が出現するとも、商の固有なる職能は永久に残ると云ふことである。正確に言へば、社會生活を營む人類が少くとも今日と等しき、或は今日以上の生活條件を保持せんとする限り、合理的生産及び各種分業は愈々必要なるべく、従つて商が有つ本來の職能はその重要性を失はずと言ふことである。私的企業としての、又營利主義に導かれたる商業は或は何時の日か存在理由を失ふかも知れぬ。然れ共、經濟財の配給てふ作用は常住の要素である。此の故に、私は本論に於て反覆して、商の固有職能の認識を力説した。蓋し之は社會組織の如何に制約せ

られざるが故に、私は第一次的に重要なりと信ずるからである。かくして、論じ來つた凡ては、獨り或る特定の社會組織にのみ制約せらるゝことなく一般的に立言し得ると信ずるのである。